
桜が舞い散る

月夜輝石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜が舞い散る

【Nコード】

N6751M

【作者名】

月夜輝石

【あらすじ】

「ありがとう、ありがとう、ごめんね…」桜が舞う季節に、彼女は一人になった。皆で見た最初で最後の桜は今までに無い位、とても綺麗だった……。

世界は魔法派と科学派のふたつに分かれた。魔法派から追放された少女、美咲は科学派に強引に入れられてしまう。しかし、美咲は科学派で自由を手に入れることが出来、居座ってしまう。そんな彼女の幸せは長くは続かなかった。

。。*。。 目次の背景が正常に映らない場合は先にこちらをア

クセスしてください
origin.fc2.com/w/in/windy2/im
age378-1600x1200.jpg

prologue

† 始まりの章（前書き）

新連載ですッ

prologue † 始まりの章

——貴方は…一体どうしたいの？

私は…みんなと一緒に…

人生を歩みたい

最後の瞬間まで…貴方と、居たい

共に、生きていたい…

毎日繰り返して来る朝。

例え絶望に墜ちても、暗闇にいたくても、それを許してはくれない朝。

「……おはよう」

傍に誰も居ないのに、
家族も居ないのに、なんで私は独り言を言うのだろう。

「なんで、私だけ…」

——生きてるの？

みんな、みんな死んでしまったのにどうして私だけ？
どうして今ここに生きてるの？

叶恋も、圭介も、歩夢も、未来だつて…死んでしまった。
大切な人たちはみんな死んで…私だけが置いて、空へと旅立った。

あの時…美咲という私だけが死ねばよかったのに…

chapter? † 出会いは春の終わり

時は、魔法時代

科学は捨てられ、魔法が世界に残った。と、思われていた。
世界の一部には科学を捨てきれず、魔法を手にとらなかった。その中にはもちろん私は居なかった。まだ、その時は――……

私は魔法派から追放された。

ただ……科学に少しだけ興味があっただけなのに、魔法派は私を追出した。「科学は必要ない」と言っ

そしてもうひとつの理由は王女様の気まぐれ。暇だったから魔法派から追い出した。

私は……どこに行けばいいの？

そう思いながら誰も居ない暗く、静かな森を歩いていた。

「おい、これ食べそうじゃねえか？」

「きゃっ！」

どこからか聞こえた一言で体が軽く浮かせる。と、同時に気の抜けた声が出てしまう。

もしかして魔道士？……逃げないと。

「てめえ……何やってんだよ？」

手遅れでした。

声をかけた少年は私の肩に掌を置き、呼び止めてた。男の人の声で、同じ人だと思う。

「ごめんなさいッ！ もう2度とここに来ないから、殺さないでッ」

魔法派が最後に私に言った言葉は、「もう2度と魔道士に姿を見せるな。今度見せたら殺してやる」。これも王女様の気まぐれ。私を見て遊んでる。

この人たちが魔法派だったら、私の命は無い。しかも、魔法派であるという可能性は非常に高い。科学派は世界に一箇所しか居なくて、どこに住んでもかも私にはわからない。

「何、言ってたんだ？ 殺してほしいならサツくと殺してやるから安心しろ」

「逆に安心できないと思うよ？ 怖がらせちゃいけないな」

先ほどの男が出てきた草むらと、同じところから出てきては、「ハハハ」と今でも笑いそうなほど笑顔を向けて、違う男が出てきた。

「俺は一切悪くねえ！ びびったあいつが悪いんだ！」

「ご、ごめんなさいッ」

彼に睨まれ即刻誤ってしまう。殺される――…。それが王女様に突き出される。

「そ、それでは私はこれで」

彼達からすぐに逃げられるように距離をある程度とる。たとえば彼らが魔法派であっても、科学派であっても居場所は作れない。

魔法派は科学派と嫌うように、科学派も魔法派を嫌っている。そ

のため、彼らがどちらであつても同じようなことになる。

「待て。お前まさか…」

「めっそもございません！ スパイだなんて私には出来ませんからッ」

「……何も言つてねえよ」

不良らしき彼は呆れたように口を開く。

その彼とまた更に距離置きに彼から遠ざかる。しかし、不良の彼から遠ざかっていたばかりに、後ろに居た爽やかな彼の近くに行っていることになっていた。 もろろんそんなこと私は知らなくて。

「きゃッ」

急に体が宙に浮き、お腹のあたりに硬いものがあたる。爽やかな彼が軽々と担ぎ上げた。

「少し俺と話そ」

「わ、私は貴方達に話すことなんてありませんッ！ 情報がほしいなら魔法塔か科学塔に行つて下さい！」

魔法塔とは、魔法派や魔道士たちの個人情報全て記憶されている。それだけでなく、どんな魔術があるか、誰がどんな魔法を使うかまで、細かく記憶されている。

それに対して科学塔は、魔法塔と同じ役割をしているが、違うところは記憶しているのは魔法ではなく、天文学や生物学。科学に関する情報が少し残らず機械によって記憶されている。

「俺たち魔法とか魔道士に興味ないんだよね」

「えッもしかして科学派？」

魔法派じゃ…ない。ここに、居たんだ。科学者が、科学派が！
担ぎ上げられていたが、何故だか彼はそつとおろしてくれた。そ
して笑顔で私に尋ねた。

「そう言つと君は魔法派なのかな？」

「えと…魔法派ですけど、正確に言えば魔道士で…」

カシャッ

「えっ」

不良の男がどこからか出した銃を私の胸に向ける。魔法派は科学
派を嫌っている。それは先ほど言つたとおりで、科学派も同じ。

魔法派を…魔道士を毛嫌いしている――

「じゃあお前死ねよ」

先ほどよりも低い声。怖い、怖い怖い。

「い、いやッ」

「やめろ、未来！」

「きゃっ」

不良の彼を止めながら右手で私を投げ飛ばす。その力があまりに
も強く飛ばされた先にあつた木に頭を強打してしまった。ああもう
やだ。こうなるなら自殺しとけばよかった。

追伸 科学派の人は力がさぞかし強かったです。

chapter? † 出会いは春の終わり（後書き）

はい、ふざけてますねっ

ホントすみません。。。。

chapter? † 昔憧れた人（前書き）

初の3000文字越しです!!!

今回のだけで3回は小分けできたのに…

サブタイトルを考えるのが面倒だから少なくともしようと思ってないですよッ！

ただこの話は長く書いてみようかと思っただけです。。。
今回だってね？

サブのつけようがないではないじゃん!!!

chapter? † 昔憧れた人

美咲。何を讀んでるの？

『科学と魔法』のお話ね。美咲にとってその話は難しいわね。んー私が簡単に教えてあげるわ！

科学派はね、科学者とか、科学に興味があつたりする人たちが集まるところなの。科学領土ってゆうのよ。

それに対して、魔法派は魔道士や、魔法が好きな人が集まるところなのよ。

アニマル派は対立してないんだけど、動物さんとのハーフの人が居るのよ。

科学も魔法も素敵なんだけど、素直になれないのかな？

魔法派も科学派も認め合つてないの。

どこに行つてしまったの？ お母様。

どうしたらいいの？ お母さん。

科学派に興味があつて、でも科学派に行つてはいけない私の立場。

魔法は嫌いではないんですよ。でも科学も魔法も両方好きで…

魔法派の人々に話したら追い出されて、

科学派の人たちには殺されそうになつて…

どうしたらいいんですか——？

「ん…」

近くで物音がし、だるい体を強引に起こす。

目を開けると三人の人影が目映る。それと同時に、頭に激痛が走る。そうだ、投げ飛ばされて…その後どうなったんだっけ？

「あ、起きてた」

「んなのしらねえよ！ 俺の飯返せ！」

「黙れッ！」

「ぐふっ」

見知らぬ少女が騒いでいる少年を力で黙らせていた。あの咽てる人は、この前の不良…。と、爽やかそうな子。それに初めて見た髪の毛の長い女の子。

視点の合わなかった風景が、少しずつ合って来て、同時に知らない場所が視界に写る。

「どこ、だ……ここ」

「ここは科学領土。未来が運んで来たんだってさ」

「か、がく、りよ、ど？」

どこ？ 科学領土——？

魔法領土じゃない。科学領土は、科学派が集まるところ——：

なんで私ここにいるの？ もっとも来てはいけない場所だと言うのに。

「魔法派の貴方が来てはいけないところです。直ちに立ち去ってください」

扉からもう幼い少女が入ってくる。瑠璃色の長い髪を一つに束ね、表情を全く変えずに言う。感情がわからない。でもどこかで見たことがある気がする。

確か、魔法派の城の中で。

「サーラ・ウィンストン？」

小さな物音がして、のどが圧迫された。瑠璃色の子が私の首を締め付ける。それは肯定のように思えた。

サーラ・ウィンストン。魔法派の薬剤師。そしてここは科学派。

「出て行け」

鋭い目つきで私を睨む。やっぱりサーラ・ウィンストンだ。絵画で見た。けれど少し小さい感じがする。

「やっぱりサーラさんだ。こんなところで会えるなんて、光栄だな」
「その光栄な気持ちのまま地獄に落とすぞ、赤髪」

さつきまではあんなに死になくなかったのに、今は死んでもいいや。もともと人に殺されるんじゃないくて、自殺したかっただけだし。サーラ・ウィンストンに殺されるならいい。

「ちよつとサラ！ この人は歩夢のせいで怪我したの！ 首しめんなっ」

「俺じゃねーよ！ つーか俺のモンブラン返せよ、叶恋！」

あの顔で、モンブラン？ いかにも不良ですっていつてそうだけど…。

すつとのをしめつけていたものが消える。サーラさんが手を離し、部屋から出て行った。

「せめて怪我が治るまではね…」

「お前が負わせたんだよ！」

それよりもなんで魔法派の薬剤師がここに？ ああ、どこに行くんだろっ。

叶恋さんの横を走って通り過ぎ、サーラさんの後を追う。どこに行ったのかな。そこまで遠くには行ってないよね。

廊下は長くて、扉がたくさんあった。部屋に入ってたらかんないけど、廊下のほうにいるかな。走りながら探してみる。あついた。

「サーラさん！」

明らかに嫌そうな顔をして、逃げた。しかも全力疾走。

「えっ待って！ なんで逃げるんですか！？」

逃げ出したサーラさんの後を追う。曲がってばかりいて、追いかけづらい。しかも早い。

距離がだんだん縮まったところでまた角を曲がった。誰かとぶつかって、これ以上追いかけられなくなっただけ。

「暴れないでね、本当に」

「あ、すみません。えっと……きゃっ」

ぐいっと抱き寄せられて、転びそうになった。そして私のすぐ背中で矢が通った。あれ、今のなんだった？ やっぱり矢だよね？ サーラさんが仕掛けたのかな？

「ありがとうございました。えっと、未来さん？」

「どういたしまして。それで君はどうして走りまわってたのかな」

どうやら名前はあつてたらしい。自然に離れたら次は肩を抱かれる。そしてそのまま歩かれて、歩きにくいけど一緒に行くしかない。

「サーラさんにお話を聞こうと思って。あの人ずっと科学派にいますか」

「サーラじゃないよ。サラね。伸ばさないの」

「あっはい。ってこれどこに向かっているんですか」

「えっ俺の部屋だけど？」

笑顔が眩しいな。じゃなくて、なぜに？ サーラさんは？

「ってなにをしてるんだよっ」

「いたっ」

見上げると未来さんが叶恋さん(?)に叩かれている。その拍子

に手が離れて開放された。

「何連れて行こうとしてんのよっ！ 彼女いるでしょ、彼女！」

「俺は純粹にサラの元に連れて行こうとしたんだよ？」

「ウソ言っとなっ！ ほらサラは多分こっちにいるから」

次は叶恋さんに手を引かれてどこかに連れて行かれる。なんか、みなさんすみません。

木目のテーブルの向かい側にはサーラさん。そしてその前には私。かなり不機嫌に座ってる。あのあと、不良さんの歩夢さんが連れてきたらしい。

ああ、やっと話せるんだ。夢見たい。

「何かお話でも？」

「私、世界監獄兼魔道士の早乙女美咲って言います。ミラです」

漢字ばかりで難しいから解説。世界監獄っていう場所に働いている魔道士ってこと。名前が二つ有るのはこの世界の常識。本当はミラのほうは名乗らないけど。

「監獄って、随分すごいところにいるね……」

「今は補助要員として入ってます」

本当は戦闘要員だけど、今は使い物にならないから補助に入った。って私の話じゃなくてサーラさんの話を。

「サーラさんは、どうしてここにいらっしゃるんですか」

「………個人の自由でしょう。あなたには関係ないです」
「私、サーラさんのこと尊敬してるんです！ 会ってお話を聞きたいと思ってたんです、昔から。むかし、から……？」

あれ、おかしい。なんで私は年下のことを昔から知ってるの？ 見るからに10歳くらいの子のことを昔から知れるの？

まって、絵画のサーラさんはもっと大人で。あれ、サーラ・ウィンストンってもう……。

遠くでがちやりと扉が開く音がしてサーラさんが立ち上がる。

「^{みなと}湊様！」

聞いたことのある名前に反応してしまう。でも、ここは科学領土で湊が居て当たり前だということは分かる。立ち上がったサーラさんが音のするほうに走っていった。

湊とはもう何年も会ってない。それどころか連絡もとってない。どうしよう。

「魔道士が来ていますが、どうされますか？」

見えないところで二人の会話が聞こえる。「名前は？」と言ったところで、扉が開かれる。やっぱりこの声、私の知ってる湊だ。入って来たのは真っ黒の髪をした少年。私の顔を見ると同時に表

情を曇らせる。

「お前……生きてたのか。動物に食われたかと思ってた」

魔法派と科学派とは別にもう一つ領土がある。それがアニマル派。動物達の集まり。興味があるからと言って入れるわけではない。まず第一条件は動物とのハーフであること。そうじゃなくても、入るにはアニマル派の領主に首筋を口付けられないといけない。

「なんの用だ」

「別に……私は話を聞いてたの」

「そうか」

出された水がコップに水滴となって滑り落ちる。長い長い沈黙。どうしよう。まともに話せない。

静か過ぎる部屋でバリバリ何かを食べる音だけが聞こえる。そんな中湊が口を開いた。

「歩夢」

「おう！」

「こいつを部屋に閉じ込めとけ」

「任せとけ！」

湊に話しかけられるまで、バリバリ音を鳴らしながら食べていた歩夢さんは、最近恒例になって来たのか、担ぎ上げられる。毎回のようによられておなかが痛い？

「え、高ッ！」

爽やかな彼に担ぎ上げられていた時とは高さが違う。前回とは全

く違う高さに落ちてしまう恐怖感が身体中に湧き上がる。そのため反抗したら堕ちる。

「下ろして！ 閉じ込められたら…」

「不自由にはさせねえって。多分」

こうして私の抵抗もむなしくどこかの部屋に閉じ込められた。

chapter? † 翼を失った鳥

「出してっ！ 閉じ込められるなんてやだ！ みなとー！」

「その湊の頼みだよっ」

今にもあきそうな扉がガチャガチャ鳴らしながら引いてるこちら側と、必死に抑えてる向こう側。どうして私が閉じ込められないといけないの？ 意味わかんない。湊になにもしてない！

「みなとお。助けてっっ！ あんたの家燃やすわよ？」

「怖いこと言うなよ！ とりあえず落ち着けっ。そしたら湊呼んでやるから！」

それを聞いて、ガチャガチャしてた手を止める。扉を背にして座り込む。もう、疲れたよ。

「……湊とは知り合いか？」

「まあ、そんな感じ……です」

知り合いと言うよりも、敵というか、友達というか、兄妹というか……。言ってしまったらもう面倒だからそれにしとく。

「科学派と魔法派がねえ……」

私と湊は属さない時にすでに会っていた。もう少しで言いそうに言いそうになった。これも言っではいけない。真実も言えない。言葉ですら自由を奪われた。

なんとしてでもここから出ないと。私は誰かに囚われるなんて人生は望んではいない。

扉が開かないなら窓がある。そう思い窓に手を掛けるもののどんなに力を入れても開かない。

「お前結構上の身分だろ？」

こっちは脱出するのに頭を使っているのに、暇そうに聞いてくる。一応答えたほうが、怪しまれないはず。

「それなりによかったですよ。普通の人と比べれば」

王族ですから、血は繋がってなくても。

窓ガラスを割って出れるかもしれない。割るのに丁度いいものはあるだろうか。部屋を一通り見ると、

「あつた…！」

広い部屋に何個かあつた椅子。赤いクッションに、背もたれがやや高め。思わず感嘆の声が漏れる。

「何があつたんだ？」

その返事には答えず椅子を持ってすぐに窓に近づく。もう怪しまれてもいい。何階か分らないけど、とにかく出れるならいい。閉じ込められるなんてごめんだから。サーラさん、ごめんつ。

——割れる！

粉々に割れた窓ガラス。床に散乱するガラスの欠片。荷物も何もないからすぐに出られる。心残りは湊とサーラさんだけだ。

魔法でほうきを取り出した時扉が開いた。

「おま…っ！ 修理代がかかるだろうが！」

「えっそっち！？」

私はもう何が壊れても関係はない。窓を抜ければ『自由』が手にはいるから――。

走ってくる歩夢さんが近づく前に窓から降りる。けど、予想以外に高さがあった。ほうきに乗っててよかった。

「させるかつっ！」

あまりに突然のことで声すら出ない。ほうきの端に、飛び乗ってきた。えっここ4階！

「ばっ揺らすな！」

「それは私のセリフっ。う、動かないで！」

ぐらぐらゆれるほうきで、バランスを崩して落ちた。なぜか私が。それなのに歩夢さんは残って、浮いてる。

最悪っっ。出来れば魔法派の領土で死にたかった。

「――っ。大丈夫？ 美咲ちゃん」

いつの間にか瞑っていた目を開けるとすぐ近くに爽やかな青年。墜ちてきた私を受け止めようとしたのか、墜ちてきた速度と私の体重で下敷きになったただけだった。

「…っ……平気、です…」

失敗した。あいつのせいで、あいつのせいでつかまった。いまだ

ほつきにぶら下がってる人を、ほつきごとどっかに飛ばす。

「魔法派に、戻ります…」

追放されてもきつとなんとかなる。私が住んでいるところは誰も来ない。使用人は口止めすればいい。魔法を使って。誰にも見つからないように生きよう……

「それは許さない」

どこから出てきた湊。本を片手に持って、黒髪を揺らす。

「監禁でもして、私を戦争の引き金に使う？」

何故私を出してはくれない。科学派は魔道士を嫌っているのだから、湊だって同じになった。私は彼らの敵。城の者を戦争の道具としてあつかうのが当たり前。

「いや、それはない。お前と戦争なんて起こしたら科学派は間違はなく、壊滅だ」

「自嘲すんな」

もう魔法派と科学派が戦争を起こしてもいい。沢山の人死んでもいい。私には関係の無いことだから。でもまあ魔法派は私には加戦してくれないだろうけど。私監獄のほうだから。

「ただの暇つぶしだ。お前も嬉しいだろ？」

「えっ別に」

「おい」

この時私は気付かなかった。この時点でつかまってから、もう逃げられないことが。逃げることが許されない。

逃げたら自由は手に入る。

でも逃げることは出来ない。

誰かがずっと見張っているから。

翼を失った鳥みたいだね

chapter?

†

翼を失った鳥（後書き）

はい、編集！

chapter? † 触れることの出来ないもの

おとうさん、おかあさん。

どうしてボクらのところに帰ってこないの？

小さな少年の、小さな声。それは薄れた記憶の中にある、古びた時代。

ごめんね。

おかあさんと、おとうさんは――…………

「サーラさん、サーラさん」

「鬱陶しいです。死んでください」

昨日からここの屋敷にいる。ちなみに泊まりました。4階の窓ガラスが割れた部屋使わせてもらってます。

湊曰く

「家に帰る？ 事情聴取するからここに残ってる」

らしい。警官のような仕事だなんて思った。

だからその間はここに住まわせていただいています。食事のほう
は食べてないけど。

「毎回思うけどよオ……あんな冷たくされてよくべたべた出来んな」
「ドMなの？」

未来さんと歩夢さんがゲームをしながら言った。ちなみに歩夢さ
んは途中で落ちたらしい。

「いやもう逆に嫌そうな顔を見てるだけでなんか嬉しくなっちゃっ
て、いじめたくなるんですよ」

「Sだね。それも質の悪いDS」

笑顔で物事を言う未来さん。テレビゲームとやらをやっていたら
しく、こちらを見ないで言った。

「美味いーちよつと一緒に来てくれない？」

「えっ……外出は湊の許可取らないと……」

湊の許可が無ければ恐らく外には出られないだろう。バリアを張
った張本人が許可しない限り、外の空気すら満足に吸えない。

でも、あの湊だ。どうせ「却下だ」とでも言うだろう。私は街に
行きたくもないし、自然にも浸りたくない。それを分かった上で彼
に聞きに行くのだ。

最低な想いを載せて、彼女は足を運ぶ。

「いやゝよかったね。許可下りて」

「永遠に下りなければ良かったのに……」

人々が行き来する騒がしい街。多くの商品が立ち並ぶ店。彼の性格なら高い確率で許可はしてくれないと思ったのに、彼が言ったことは彼女が予想して居ないことだった。

『街に叶恋と？ …… 東部だけならいい』

「次あの店ね」

彼が許可してしまったせいで、私は数え切れないほどの店に入っている。自信があつたから聞きに行つたのに……。

仕方なく叶恋に付いて行こうとした私の目にあるものが映つた。同じ服を着ている人の群れ。なにかの集団だろうか？ それとまたの揃いで買っただけなのか。彼女にとっては全く分からなかった。

「どうしたの？」

立ち止まった私に近寄つて来た。彼女に振り向くことはなく、訳

の分からない集団を見ていた。

「なんですか…、あの集団。テロリストか何かですか？」

「なに言ってるの？ 学生だよ！ が・く・せ・い・！」

聞きなれない言葉を必死に理解する。学生ってなんですか。テロ組織のグループ名ですか？ それとも会社の名前？

考えた末に私は素直に叶恋さんに聞いた。

「学生って、なんですか…？」

しかし帰ってきたのはきょとんとした彼女の顔で、「学生は学生」と爆笑しながら言われただけだった。

「学生ってゆうのは、えっとねー。いろんなことを学んでいる人のこと。あたしも学生ね」

学ぶのなら自分ひとりではればいい。他人の手を煩^{わづ}わせなくても、解るだろう。私には理解出来ない。

「それより早く！ セール終わっちゃうじゃん！」

叶恋はそれだけいい、彼女の手を引いた。

「この服、似合うんじゃない？」

手渡されたのは、クリーム色に近い色をした長袖のネグリジェ。一体何故、それを彼女は選んでいるのだろうか。

確かに私はまだ一睡もしていないし（倒れたときは除いて）、そんなものは必要がなかった。だが、服は今着ているだけで、それを着て寝ると言われても困る。

「せめて半袖に近いものでいいですから、寝苦しく無いものでお願いします」

長袖では暑い。それに次の季節が夏だ。長袖で夜を何とかしようとは到底無理な話である。それに私は暑いのが苦手で、長袖なんて滅多に着ない。だから今も肩が出ている服を着ている。

「じゃあこれでいいよね。ちなみに拒否権はないからね」

お金はあたしが払うしね。独り言のように呟く。

私もお金は持っているものの、今日は生憎部屋に忘れてしまった。屋敷に戻るのも面倒くさいと叶恋が言うので、彼女がお金を払っている。拒否権がないのは当たり前だろう。

「あと、必要なものはないか……。帰ろー」

「あっ……」

父と母と手を繋いで楽しそうに微笑む子供と、それを見て幸せそうな父と母。その光景に目を奪われた。

家族の暖かな愛情。それを見ているだけですぐにわかった。幸せな家庭なんだって。両親のいない私には、羨ましいだけで触れることが出来ない、遠い光景。

「美咲……？」

「……なんでもないです。帰りましょう、叶恋さん」

自分も親の愛情に触れることが出来ればよかったのに……。自ら突き飛ばしてしまった。

叶恋の後ろをゆっくり歩いていると、近くで聞いたことのある声がした。

「歩夢、この子犬可愛いよな？」

「それ子犬のレベル超してね、未来？」

「……」

この二人の声も聞いたことがある。叶恋さんに目をやると、迷惑そうにその光景を見ていた。道のだ真ん中で子犬（のレベルを超した犬）を抱いた未来さんと歩いている歩夢さんに、彼女は近づいた。

「その犬持つて帰る訳？」

「叶恋、もちろんだよ。かわいいじゃんか」

彼らに近づいてみてわかった。学生とやらの服を着ている。もしかして、サーラさんや湊も学生のなのだろうか。

「ほら、美咲も可愛いと思うよね？」

抱きかかえたまま私に犬を向ける。ふとその犬と目が合った。これはただの犬ではない。そう感じた。

「これ、狼ですよ。犬じゃないです」

狼だけでなく、アニマル派の人でもある。この暗い黄色い目はアニマル系の知り合いに居た。しかもその知り合いは狼型だった気がする。

「貸してもらってもいいですか？」

「お前、喰われんなよ」

「大丈夫です」

それを聞くと彼はその生き物を私に渡してくれた。少し暗い黄色い目にこの毛触り。これはやはり私の知り合いだ。しかしここで名前を呼んでも面倒になるだけだ。「可愛い……」それだけ言い、彼に狼を返す。

「ということで持って帰ろうか」

「人の物ってこともあると思うんだけど」

「首輪もないし、飼われてはいはいですよ」

実際彼は飼われていないし、人の物でもない。これが知り合いでなければ親から勝手に引き離しているのと同じことになる。

私としては、引き離される気持ちがわかるし、愛情にも触れた覚えがない。

さい

どうか、本物の愛情を私に教えてくだ

chapter? † 触れることの出来ないもの（後書き）

最終的にはこの話はあんまり必要なかったと思いますね（笑い）
でも狼を持って帰らなければ話があんまり進まない…

chapter? † 途切れた糸

「おい、誰が狼を飼っていいって言った」

敷地内にある庭の大きな木に腰掛け、本を読んでいると不機嫌そう
な声が飛んできた。その視線は私の頭の上に乗っている生き物に
突き刺さってる。

「まあいいじゃないですか。それで、用件は？」

本から目を離さずに湊に質問する。用もないのに彼が私に尋ねて
くるわけがない。

「その……この前は、悪かった……」

「そのことに関して私怒ってないよ」

相変わらず本から目を離さずに言う。湊が前に立っているせいで
よく見えない。本を顔に近づける。

「本近すぎだろ」

「誰かが私の前に立ってて暗くなっただけだからね」

少し嫌味をつけて言っただけで彼は静かに隣に座った。ページを
捲るとさっきよりも字が小さくなった。よく見えない。

「それに遠視なのにメガネ掛けてないしね」

「仕事、書き物とかないよな」

仕事は世界牢獄の署長。囚人などが集まる場所の長。見た感じでは書き物は少ないが、実際はとてつもなく多い。ちなみにアニマル派の南部に位置する。

「多いけど、大事な書類以外は副署長にやらせてるからあんまりないかな」

「可哀想に……副署長」

右足を組み狼を撫でる。動物、好きなんだ。昔は犬にほえられただけで泣いていた彼が、動物になれていた。

「じゃあ何に関して怒ってる？」

「何に対しても怒ってない。でも敢えて言うなら魔法派の城の人たち」

私を暴行を加えたこともあるし、なにより今回の件についてだ。

追放したこと。実際は元々城には居なくなかった。けど、追放までは望んでいなかった。でも、自分がやってしまったのだから。

「その件について碧^{みどり}から伝言がある」

「碧義姉様から？」

私の4つ上の義姉。今は城で書類をまとめていると思われる彼女から、なんの伝言だろうか。そもそも私に伝えることなどあるのだろうか。

「『追放は白紙に戻した。兄上が嫌いからやっただけ。帰りたいなら帰ってきなさい』だって」

帰りたいなら、か……。魔法派に帰っても楽しくないし、こ

こにいても意味がない。どちらに居ても私にとっては重荷になるだろう。

「……行こうかな」

昔住んでた森の奥の小屋に。それとも職場のところに行こうか。どうせ帰る場所も待っている人も誰もいない。

「別にここから出て行けとは言っていない。……ここにいても、いい……」

少し俯いて小さくなりながら言う。科学派に居ることも可能か……。私に与えられた選択肢は四つ。魔法派に帰ることと、森の小屋に住むこと。それと、職場に住み込むか、科学派にこのまま居座ること。私はどれを選ぶだろう。

読んでいた本を静かに閉じる。

「素直になればいいのに……」

「ツ——！ ああ、もう！ 膝貸せ！」

「はいはい」

湊は私の膝に横たわり、目を閉じる。他人から見たらこの光景はカップルに見えるかもしれないが、彼らにとっては全く何も感じない。

「私、しばらくしたらあの小屋のほうに住もうと思う……。そしたらここに遊びに来ていい？」

独りは寂しいから。せめて湊の傍には居させて？ 我儘だっけどもわかっているし、敵軍のところに遊びに行くのもおかしいと思う。

昔は遠慮なんて少しもなかったのに、いつから彼を他人として見ていたのだろう。長い年月の間に何が变ってしまった？

「……俺は、何も变らない。美咲に遠慮なんてされたくもない」

少しだけ。ほんの少しだけ照れて私が欲しかった言葉を言ってくれる。

「ありがとう——」

一際目立つ赤い髪の少女と、漆黒と言っていいほどの黒い髪の少年。少女の膝の上で寝ている湊と、膝の上で彼を寝かせている美咲。起きている時ではわからなかったが、この二人が目を閉じて眠っていると、実によく似ている。彼女の長い髪を切り揃えて色を染めてしまえば、見分けが付かなくなってしまうのではないだろうか。

「絵になる……」

突然現れた謎の魔法派の彼女。年齢不明。職業不明。出身地不明。解っているのは名前だけ。——増田美咲。

魔法派に所属しているのにも関わらず、科学派の領主の息子と知り合い。それもかなり親しい仲。対立しているふたつの領地の人がどこで知り合ったのだろう。それが不思議でたまらなかった。

「参ったな……」

湊に聞いて見ても「自分で考えろ」と不機嫌に言っただけ。美咲には聞くタイミングが見つからない。それにあまり親しくない俺が聞いても、嫌がって答えてはくれないだろう。

でも、魔法派の人間が科学派の領主に近づくのは良くないのはたしか。ならこのまま銃で彼女を殺してしまおうか。彼女の頭に銃を向ける。

「何をしてるんですか、未来さん」

眠っていた彼女の目が突然開かれたと同時に、身を乗り出して首筋にナイフを向ける。この少女も人を殺すことが出来るのだろうか。

「何をしていると思う？」

「ざっと見て私を抹殺しようとしてるんですかね？」

この状況になっても、彼女は余裕のある笑顔を見せる。何故こんな状況で余裕なのだろうか。殺されることが免疫になっているのか、それとも死ぬのが怖くないか。やはり彼女は謎が多すぎる。

「いきなり落とすな、バカ女」

急に下から声がすると思うと、領主が頭を抑えてゆっくり起き上がって来た。美咲が身を乗り出したせいで、膝に頭を預けていた湊は当然のように地面に落ちる。それも勢い良く。ああ…痛そうだな。

「私、今は死ぬわけにはいかないんです」

ナイフを片付け、立ち上がりながら言った。そのまま庭へと姿を消した。

——『今は、死ぬわけにはいかない』

なら、もっと先の将来は死んでもいいということだろうか。彼女の言動には全て、深い意味があるような気がした。

「やっぱり謎だねえ……………」

いつか、謎の少女を理解できる日は来るのだろうか。

chapter? † 途切れた系（後書き）

一ヶ月放置すんません。

サブタイに意味はあんまないっすね、うん。
もう全然更新しなくてごめんなさいッ

chapter? † 感情と温もりと願い

純白の薔薇で出来たバラ園。その真ん中で綺麗な瑠璃色の髪を揺らしながら背伸びをしている少女——サラが目に入る。

自分の身長よりも高いところにある枝を切るうとしているのだろうか。腕を伸ばし、つま先で頑張っている。手伝ってあげたほうがいい？ 彼女のほうに歩みを寄ると、彼女が私に気づいた。

「……………その線から来ないでください、魔道士」

「ええ！？ ここからですか！？」

指差された場所を見るともうすでに爪先に位置する線。よくここに線があつた。

「更に言いますと、この敷地から出て行ってほしいものです」

「ご心配に及びません。早ければ明日、この敷地から出て行きますから」

無表情でいう彼女にとびっきりの笑顔で言つてやった。正直言つと彼女は少々……いや、かなり苦手なタイプだと思う。初対面の人に失礼なことは言う、扱いは雑。まるで、何をしても許されるような

「更に更に言いますと、科学領土に立ち入らないで欲しいものです」
「貴方に言われなくてもそうしたいですよ！ でもそれは無理な話ですね」

今思つたばかりのことをすぐにサラは言つた。次に口を開いた時は「この世界から居なくなつてほしい」とでも言いそうだ。

「なぜ？ 魔法派の貴方は入ってはいけない領域です。永遠に魔法派に籠もってて結構です」

「引きこもりになれ、と言ってるようにしか聞こえないんですけど。………仕事ですよ、仕事。面会とかにはいろんな領土に入らないといけないんです。当然、科学派にも」

仕事場に面会でもしたら、空気が悪すぎて相手が逃げてしまう。それに相手は他の領土には入れない。かりに入ってばれてしまえば抹殺される。少なくとも通行手形でも持っていないと。

「なら死んでしまえばいい。自害するのに絶好の場所を私が教えて差し上げます。喜んでください」

会話になっていないように感じるのは私だけだろうか。口を開いてもどうせ彼女は話を聞かないだろう。

静かに次の言葉を待つ。

「科学派の南部は近未来都市になっているのでビルが多いのですが、その街で一番高く、もっとも歴史のある時計塔があります。長針と短針が縦に直線になった時に飛び降りると、幸福の気持ちで死ぬるそうです。私も試してみたのですが、傷一つ着きませんでした」

ここからでもその時計塔は見えるほど高いのに、どうして無傷でいられたのだろうか。

自害する時に、か……。もしする時は時計塔で落ちようではないか。最後の幸福を味わってみたい気がする。

「もし、自害する時はそこにしますよ」

「そういえば貴方に聞きたいことがあります。その髪は地毛ですか」「俺もそれ気になってたんだよな」

どこから聞いたことのある声が聞こえた気がする。あくまで聞こえた気がするだけ。姿が見えない限りは全て幻聴。そう、幻聴幻聴。

「最初は黒だったんですけど、いろいろあつて赤になったんですよ。というかなんですか」

嫌と言うほど目立つ赤髪だ。地毛な訳がない。もし地毛なら即刻他の色に染めるに決まっている。

今も染めて黒にしたいが、どうしたことが染めても着色しない。すぐに落ちてしまう。それを知らないところだけお金を無我にしたことか。

「もし地毛なら目障りだと思ったので。今でも目障りなのに、その髪は更に目障りです」

「あなたには遠慮というものはないんですか。自分が言われたら傷つくでしょ？」

彼女に会ってから苛々が募る。失礼すぎる彼女の言葉もそうだが、それ以前にその冷たい視線も苛立ちの一番の理由だ。

「こいつ『感情』つつうもんがねえんだよなあ。傷つくとかはまずねえかな」

よ、と小さくいいながらクッキーを頬張る不良さん。いつも思うがこのギャップはなんなんだろう。ギャップがいい！っていう人の考えがわからない。気になって仕方がない。

それより感情がないとはどういうことなのだろうか。人ではないということ……ではないだろう。

「つまりどういうことですか。涙を流せないみたいな感じですか」
「いや、泣こうと思えば泣けんぞ」

「じゃああれですか。悲しまない。笑わない。楽しまない、みたいな？」

「そっいつもんだな」

クッキーを食べながら話しているせいかカスがボロボロ落ちていく。この後アリの行列が見れるかなー？

「もうすぐ12時になりますね……。お昼にしましょう。……………」

魔道士は、食べますか？」

「いえ、私はいりません。後で部屋に持って…」

「お前も食おうぜ！ 皆で食べるとマジうまいからよ！」

「昼より先に間食食べてる人が何言ってるんですかっ！」

そんな抵抗も虚しく、手首を強引掴まれ屋敷のほうに引きずられて行く。

「あれ、美咲何してるの？ 何かのSMプレイ？」

「……………拷問」

ダイニングルームに入って来た叶恋さんの方を見ず、間を開けて答える。

あのあと歩夢さんの目を盗んで、逃走を試みたものの失敗。その拳句逃げないようにと縄で椅子に縛り付けられた。

ああ、食べる気なんて少しもないのに。食べたら毒を入れられる。私みたいな下衆がここで食べては毒が盛られる。また私の寿命が縮んでいく…。

「サラ飯を作れ、叶恋は作るな」

どこからか登場した湊にも声を掛ける気がしない。厨房からひどい、と聞こえた彼女の声は流すことにしよう。

叶恋さんが厨房から出ると一緒に、後ろからサラさんもワゴンを押して付いて来る。そのワゴンの上には沢山の料理を載せて。

「今回は美咲ちゃんも食べるんだね」

「……………」

不気味なほどの爽やかな笑顔に言葉を失う。つい先ほど銃を向けて殺そうとしたのにどんな風の吹き回しだろうか。本人は気にせずに向かい側の席、歩夢さんの隣に座る。そして私の右隣に湊が座り、その隣に叶恋が座る。

「何日食べてない？」

「えっと、最後に食べたのが十日前ぐらいだったかな？」

何を思ったのか湊が私の前に置かれたお皿に一人前以上の料理を盛り付ける。

野菜はもちろん視界に入れたくない肌色までが皿に入って行く。そして見たことのないほどの笑顔で、

「食べ」

「うわぁ……悪魔だこの人」

「なんどでも言え」

視線をこちらに向けずフォークでお皿に乗った野菜などを刺し、私の目の前に持って来る。仕方なくそれを食べる。

「おいしい……」

「サラが作ったんだから当たり前だよ。サラが作ったのはね」

「ちよつとどういう意味よ！」

これはサラさんが作った物なのか。感情が無い割にはとてもおいしい。一度弟子入りしてみたいものだ。

未来の最後の一言と叶恋の会話には少しだけ耳を貸す。

「つーかお前ら出来てんの？」

「それ以前に普通は女子が食べさせるよね」

出来てる？食べさせる？一体何が？どうでもいい疑問が頭の中を駆け巡る。そのニヤニヤした顔には意味があるのか。湊の不機嫌そうな表情にも意味があるのだろうか。

「それよりもサラは何を入れてるのかな」

「毒です」

「入れないでください。というか入れてなかったんですね」

彼女のことだ。魔道士ととことん嫌って抹殺すること最優先にしているに違いない。そのサラが毒を盛り付けなかったのか。それはそれで少し関心してしまった。

「誰かに毒盛られたの、久しぶりかもしれない……」
「なんだそれ」

ダイニングルームに笑いが溢れる。ああ、人の笑うのも久しぶりかもしれない。人と関わるのも久しぶりかもしれない。全てが、久しぶりかもしれない。

こんな感情は昔に捨てたはずなのに、懐かしい。

「お前後で俺の部屋に来いよ」

私の肩に手を置いて湊が笑いながら言う。お前変ったな、と笑いながら言っていた。みんなが笑った。ずっと続けばいいと、頭のどこかで願ってしまった。

chapter? † 長く儚い花

「湊、入るよ」

「ああ」

教えてもらった扉を開ければ、湊が外の景色を見ていた。入って来た私に見向きもしないで、立ったまま外を眺めている。

この感じ覚えてる。この雰囲気はいつも決まってあの話だった。

「お前に、聞きたいことがある」

でも私は素直にその話をする気はないから、わざと話を逸らすのがいつも決まっている。だから今回だってわざと話を逸らす。

「魔法派のことですか。それとも碧様のことで…」

「レイラ・エリデリフとアルバード・エリデリフはどこにいる」

言葉を遮り低い声で言い放つ。

まだ大丈夫。二人の話から遠ざけられる。今回も焦らず、完璧にやらないと。

「私がしるはずもない、です。もう領土から出てるんじゃないですかね」

そう私は知らないんだ。彼らが死んだとしか知らない。それ以上のことも知らないし、教えられない。片割れは何も知らなくていい。綺麗なままでいい。

「……………先日、死んだと聞いた」

「誰に聞きま「美咲は知ってたんだよな」

「またも言葉を遮りいつもの声で話す。彼はどこまで知ってしまったのか。何故私がそのことを知っていると分かっているのか。一体誰が話した。」

「本当に、死んだのか」

「真実を知っているのはあの人しかない。湊に話せるのはあの人だけだ。科学派領主、湊を引き取った人。」

「私が知る限りではその通りです」

「どこかに連れて行かれていた。その時はいつものお昼寝の時間で、少し早めに目が覚めた私はそれを見てしまった。会話だつて覚えていた。お父さんとお母さんはとうとう殺されてしまうんだ。」

「その後どうなったかなんて知らない。知る余地もなかった。知りたいとも思わなかった。あの人たちは私の産みの親でしかないのだから。」

「牢獄にも、いないのか」

「さあ、どうだったでしょうね」

「一体どこまで嗅ぎ付けたのか。」

「牢獄の奥にいる罪深い囚人は自動的に死んだことになっている。湊はその情報まで知っていたのか。そこに居ると微かな期待をこめて私に聞いているんだ。重要な情報は署長管理。私が知らないはずがないと。」

「ばつくれるな。答えろ！」

やっと振り向いた湊は怒りで顔を染めていた。

「……貴方は知らなくていいことです。知ってどうしますか」

お願いだから彼らのことは諦めてほしい。死んだ人のことなんて
思い出さなくていい。執着しないでいい。居なかったことにしてし
まえばいい。

「どうだっていいだろ！少しでも情報がほしいんだ！」

意味がわからない。情報をもらってどうする？彼らに会いにでも
行くか。会ってどうする。

気が付けば思っていたことは口に出していて、湊が私に掴み掛か
っていた。

「お前なら知ってんだろ！？ 何も知らないなら今すぐ出て行け！
必要ない！」

「湊何言って……」

今、私は何を言われた？冷静だった頭が一気に冷静さを失う。嘘
でもいい。その言葉を言わないで。片割れの口から聞きたくない。

「もう一度言う。お前は必要ない！俺の前から消えろ！」

「お前はもう必
要ない」

嘘でいいのに。嘘のままでよかったのに。また、同じことを言わ
れた。かつて信じていた人に言われた言葉を、また言われた。

「湊にまで同じこと言われるなんてね……………」

もう、信じてはいけない。

力なく堕ちた手は宙をただただ漂う。必要とされていないなら、私はなんのために生きればいい。もう、全てが終わってしまった。ドアノブに手を掛け独り言のように最後の会話を繋ぐ。

「もし彼らが領土や、民族に入っただのならその生存確率は――

――」

昔の夢を話そうか。

かつて幸せだった時の淡い夢を^{過去}

J · e s p ? r e q u · u n e f o i s d e p l u

s f a i t r e v i v r e l e t e m p s m o r t |

て語ろうか。

未来につい

未知なる希望があ

る夢^{望み}い夢を

| a i r e l . h i s t o i r e n e p e u t f a i r e |
| A u c u n p l a n p o u r f

今を一人で過ごそうか。

終わらないと信じて疑うことを知らない夢^{永遠}を

| t e r m i n a i s o n s c o n t e t r i s t e
t s o l i t a i r e n e p e u t p a s s e r ? p o n d
r e |

「なんで、教えてくれないんだよ……」

静かに闇に溶ける自分の声。暗い部屋で一人涙を流す自分。なんと情けない。自ら聞いたくせにこんなにも落ち込むなんて。

しかし彼女は知っていることの一部しか言ってはくれなかった。最後に聞いた言葉で全てを知りたくもないと思ってしまった。自分は一体どうしたいのかわからない。

「もし彼らが領土や、民族に入
ったのならその生存確率は限りなくゼロに近い」

本当の両親にもう一度会いたい望みと共に儚く消えてゆく自分の存在。姉に当たって聞き出した情報は今の自分を突き動かす原動力をも消すものだった。彼女に当たって何になった？　ただ彼女を傷つけただけ。彼女とまた逢えなくなるだけ。

あの日彼女が自分の前に現れて、ガラにも無くすごく嬉しかった。また昔のように一緒に居られるかもしれない思って。また昔のよう

一緒に暮らせると思って。また昔のように――

……

「――ッ」

机に置いてあった書類に腕が当たる。この怒りをどこにぶつければいい？捨てられた時の悲しみをどこに消せばいい？そうだ昔のようではまた、離れていってしまう。

嘘だと信じていたかった。姉が自分を売ったなんて夢でしかないと思っていた。現に彼女は昔のように俺に笑ってくれた。そんな人が自分を売るはずがない。なにが嘘か、なにが真実かわからない。

ある人はこう言った。『嘘の中にあるのが真実。真実の中にあるのが嘘。どちらも大切』だと。しかし今はどちらかが消えてほしい。自分を惑わさないでほしい。

真実だけを知りたい。嘘なんて拒絶する。本物だけを求める。偽りは容赦なく捨てる。これが俺のやり方。そうまたこれで真実本物を探せばいい。誰の力もかりなくていい。

そう、全てを独りで――

……

枯
れ
た

花
が、

chapter? † 落ちる少女（前書き）

何ヶ月ぶりの更新だろうね？

サブタイも適当でごめんね？

chapter? † 落ちる少女

「美咲が出て行った」

雨が、朝からひどく降っていた。

「まあ当然じゃね? あいつ魔法派だしな」

歩夢は気にする様子もなく叶恋に視線すら向けない。そしてチエスの駒を動かす。

そう、当然なのだ。彼女が俺の前に姿を現さないのも、科学派から出たのも全て自分がやったこと。今さら気にすることは無い。

「あいつあたしが買ってやった服置いて行きやがって……」

「そこ重視なんだ。まあ客人がいないっていうのも暇だね」

「お前もそこかよ」

彼らの話に耳を傾けず、コーヒーを飲もうと立ち上がる。サラはどこ行った、サラは。

「い——ッ!」

ガシャン

無残にコップが割れ、肌に突き刺さる。足にはガラスの破片の他に動物の歯型。そして唸り声をあげる一匹の狼。足を噛んだのはこいつか。見た感じがかなり深く噛まれた。

「何やってんの!?!」

「噛まれた」

痛い。左足が痛い。この狼はわざと噛んだ。足の肉を引きちぎろうとしたように、深く牙が入っていた。

「お前は聖職者か」

「聖職者？笑わせるな領主が」

動物とは時に何を思うか。高度な知恵と技術を持つ人間と何が違うか。それは考えることが出来るかどうか。初めて見たときから解っていた気がする。こいつは化けていると。

瞬きをする暇もなく目の前の狼が人に代わる。これがアニマル派の人間。

「あんたの方が俺よりよっぽど聖職者だ」

親を探したいほどのね。耳元で呟かれた言葉に何かが切れた。親を探して何が悪い。俺が誰を探そうと関係ない。

「お前には関係ない」

「アルバード博士。どこにいると思う？」

間髪を入れずに狼が言う。アルバード博士の居場所なんて誰も知らない。俺がどんなに頑張っても居場所だけはわからなかった。

「アルバード博士って、アルバード・エリデリフ！？」

「たしか15年前に行方不明になった天才科学者だっけ？」

「死んだよ。アルバード博士は自殺したんだ」

ここに来て初めて自殺したという証言が出た。沢山の人に聞きま

われは、みんなが口をそろえて言う。「あの人は裏切ったのだ」と。
何故、天才科学者が自殺した。何故裏切った。

「魔道士レイラも自殺した」

「魔法派の中でもっとも優秀だったあの女ですか」

「アルバード博士と一緒に心中したよ」

はき捨てるように彼が言う。こんなにも自分が探しまわった情報をこいつは全て持つてる。本当かどうかはわからないが、全てが淡々と述べている。

何故、偉大な魔道士も自殺した。どうして俺らを置いて行った。

「科学者と魔道士って心中できんのか？」

「二人は一駆け落ちしたはずだった《・・・・・・・・・・・・・・・・》んだ。なぜ自殺したと思う？」

歩夢の言葉を見無視してまっすぐ俺を見る。いや、見下してくる。

駆け落ちしたのだって知ってる。だから自分はここにいるのだから。

「答えは脅されたからです。たしか大陸を収める国王に脅されたあげく、自殺したと私の調査ではわかっています」

「そう……………あれ、あんたってまほ「なんですか。文句があるなら躊躇なく言ってください」

今度はサラが狼の言葉を遮り、背筋が凍るほどの冷たい視線を送る。その間にも左足から血が流れる。

なんで国王に脅されて自殺してしまった。二人なら国王だって簡単に殺せたはず。

「もし彼らが領土や、民族に入ったのならその生存確率は限りなくゼロに近い」

そうか、彼らは子供に与える食料を買ったために領土に入り、国王に見つかった。そして脅されて自殺した。

「彼らは子供を生んだ後に死んだらしいよ。二人の遺体は別々の場所に保管されてね。アルバード博士は時計塔に保管され、魔道士レイラはどういうわけか見つからなかった。というか二人の遺骨も遺体も見つからないんだよ」

「意味わかんないんだけど」

保管されたのに、見つからないと彼は言う。保管されれば遺体も遺骨も確実にある。この男は見落としただけだ。消えたわけでは決していないはず。そんな非科学的なことは起きるはずがない。

「時計塔にないんだよ遺体がないんだよ。土の中にも埋まってなければ、棺桶すらない。アルバード博士が死んでるのもわからないね」
「魔道士レイラの遺体は海に沈まれたことになっていますが、一生涯を負えるまで探したサメ型の方は、どこにもなかったと言いました。こちらも怪しいものです」

「さっぱりわかんねえ」

「つまり二人は死んでないかもしれないんだよ」

探しても、探しても、答えには辿り着けない。何が真実で、何が偽りなのかわからない。二人は死んだのか。それとも生きているのか。

「本当の真相なんて誰もわからない。でも、一人だけわかってしまった」

「美咲は、魔道士レイラとアルバード博士に会ったよ」

——二人は本当に死んだのか。

——その通りです。

死んだと肯定していたのに、その本人は会っていた。嘘をつかれた。

「じゃあ生きてんじゃん」

「つつか本人に聞けばよくね？」

当然のことをなぜか相談しあつて二人を横において、狼の話を聞く。分が悪そうに目を逸らして、戸惑いながら言った。

「いや、それが……………なんていうか……………おかしいんだよ」

「おかしい？」

「結構前に突然会ったって言って、狂ったみたいに言うんだ」

いつも冷静な姉。狂った姿なんて想像すら出来ない。決まったように同じ笑顔を向けてくるあの人。狂うことなんて出来ない。

「『とっても綺麗。ここは200年前と同じままだわ』って」

「200年前ってそんな生きてるんだ」

「いや、気付けよ。そこまで生きられないつつの」

200年前と同じままの場所なんてひとつもない。150年前に隕石が起きて、全てが消し飛んだ。最低でもこの大陸で昔のままなんて場所はない。

「いやそこじゃなくて、美咲は極度の潔癖症で、雪すらも汚いつて言うくらいなんだよ。その美咲が綺麗なんて言うんだ」

「2000年前と同じままで綺麗なんて場所。そんな場所どこにもない」

「だからおかしいんだよ」

美咲が潔癖症なんて始めて知った。聞いてみれば綺麗なものでも汚いと思うだけで、触れてもほとんどは大丈夫だと言う。

ふと、狼の前に画面が浮き上がる。プログラムか。

「緊急事態発生、緊急事態発生。科学派、時計塔にて早乙女美咲落下。原因は何者かに押されたと思われます。以上です」

黒い何かの真ん中に、赤いものが画面に映る。赤い赤いリンゴみたいな髪。黒く羽根を羽ばたかせるたくさんの鳥。腕で必死に鳥を払っているのが分かる。

多分誰から見ても自分から落ちたようには見えない。無理やり落とされたようにしか思えない。物凄いスピードで落下していく中、唯一聞こえたのは、

『みなと』

この手で出来ることがあるのなら、
どうかあの人を助けてください。

chapter? † 私は、なに？

迷いながら歩いて二時間。

意外にも時計塔は近かった。もっと遠くにあるとずっと思ってた。黒い黒い建物の中で、一つだけ真っ白な塔。高く、高く、どの建物よりも高い場所が最上階だった。科学はやはり魔法とは違う。何処にでもありそうな石で積み上げられた壁は、少しも隙間がない。多分地道な計算で出来てる。

「ちよつとお嬢さん」

「あつ私？」

白い髪に、白い服の老婆。真っ黒いローブに深く身を包んだ私とは、見事に対照的な人。そんな人が私に用なんて、だから老人は嫌い。

「アルバード博士と会いに来たのかい？」

「い、いえ……」

アルバードはここに居ることになってるんだ。時計塔なんていう息苦しい場所に10年も長い間閉じ込められているんだ。

「博士はコールドスリープ中だよ。立ち入り禁止さ」

「コールドスリープ？」

「眠ってるんだよ。博士は悪くないのに、処罰は100年の眠りなのさ」

100年間眠ることが出来るのか。あつでも目覚めた時老いぼれ

になつてすぐに死ぬか。そうじゃなくても多分あの人なら、変わり果てた世界を見てショック死するか。

変ることを恐れていた人間だから、それはきつと耐えられない。

「私には、関係ないから」

「……………」

不機嫌そうな目で私を見て、息を深く吸い込んだ。そしてあるうことが大声でこう叫んだ。

「魔女だああああ!!」

「!?!」

歩いていた人々が一瞬にして私を見る。老婆に顔を見られた。これじゃあもう科学派に入れない。野次馬に知られてはいけない。こいつのせいで無駄に注目をあびた。

すぐさまナイフで老婆の首を飛ばす。ぐちゃりと嫌な感触がナイフと伝つて感じる。目が見開いたままの頭はゴトツと、地面に落ち、胴体もそれについていくように倒れた。

甲高く響いた悲鳴と、赤く染まって体を最後まで見ないで、返り血のついたローブを、更に深く被って塔の階段を駆け上る。逃げ道がもうこれしかなかった。

「捕まえろ! 密入国だ!」

「牢獄にぶちこめ!」

その牢屋は私が管理しているんですけど。

後ろを見ずにひたすら階段をのぼる。前から来た正義感振りかざした住民を銃で撃ちながら、魔法で速度を上げていく。もう魔女ってバレたから使っても支障は無い。

荒い息を整えながら、見えなくなつた領民を確認して、ロープだけを燃やす。こうすれば見つからない。後は展望台にきている人たちに混じつて、歩く。

「どこに行った！」

「黒いロープのやつだ！ 遠くには行つてない！」

背中でのその会話を聞きながらくすりと笑う。今の服は白。黒なんて少しも使つてない。もうバレない。顔についた血をさり気無くふき取る。そして12時の文字の近くの柵で出来た展望台に上がっていく。

下を見下ろせば赤い花が咲いていて、周りには色とりどりの小さな花が咲いている。ああ、またやつちやつたな。

今だ聞こえる叫び声と、更に広がっていく赤い花。だんだん人も集まつてきて、大事になり始めてる。まあ魔女を見た人だからね。

「おや？ ここに魔道士がいるではないか」

真後ろで、小さなでもはつきりと聞こえる声で言った。確かに私に向かつて。盲点をついたはずなのに、こんなに早くばれた。焦りを隠して、声の主に向き合う。

「っ——なん、で」

動物の耳。長い尻尾。トラ型のアニマル派。もう会うことの無いはずの昔の知人。浮かべていた作り笑いがすつと引く。

「シリ、ウス……………」

「久しいな、ミラ」

6年前と同じ姿で、はじめて会ったときと同じ笑みを浮かべて言う。よかったことに周りには誰一人居なくて、私が魔道士つてことも聞かれていない。まさに不幸中の幸い？

「下は騒ぎになっている。魔女がこの塔の管理人を殺したからな」

「あの人、管理人だったんだ。知らなかったよ」

知ろうともしないけど。随分暇な人間なこと。いつそ死ねばいいのに。あ、もう死んだか。恐怖を隠すためにどうでもいいことを考える。会いたくなかったのに。

「命令だ。この薬を飲め」

持ち出したのは真紅のような赤い液体が入った、小さな小瓶。手の平に簡単収まるくらいの小ささ。そのくらいの量であっても私には飲めない。

「断る。知ってて言ってるんでしょ」

「知ってて飲ませる気だったんだ」

小瓶を開けて、薬を口に流し込む。落ちた蓋が無残に割れるのを聞きながら、とっさに逃げていた。正しくは、逃げようとしていた。だってここは、逃げ道が一つしかなくて、シリウスの隣を通らないといけないから。捕まるなんて、当たり前すぎたのかもしれない。

「離してッ！」

さすがトラ。力だけは異常に強い。爪が食い込んで、少し血が出る。

そしてそのまま自分のほうに向かせて、唇を合わせる。流れ込む。

できた液体の味が口にすぐ広がる。思わずそれを飲み込んでしまった。飲んだら、いけないのに。

唇が離れたと同時に目眩が押し寄せる。ガシャンと柵に寄りかかって、大きくむせた。

「おつとここまで反応が出るのか。想定外だったな」

「つむかつく……………ッ！」

「それはそれは嬉しい。また、会おう」

浮遊感を感じた。伸ばした手は空を掴んでいて、何も手にはしていなかった。

突き落とされた、そう理解できたのは、落とされて少ししたとき。このまま落ちて死ぬ？ それとも骨折だけですむ？ ああもうどこでもいいや。

だって私は、いらない子だもの。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6751m/>

桜が舞い散る

2011年10月6日14時14分発行